

## 原著論文

# 「雨の中の私」と「雨の中の人」 雨中人物画の教示の比較

中京大学心理学部 鍵谷 葵  
中京大学心理学部 馬場 史津

A comparison of "Draw-A-Person-In-The-Rain" tests with two different sets of instructions

KAGIYA, Aoi (School of Psychology, Chukyo university)  
BABA, Shizu (School of Psychology, Chukyo university)

The Draw-a-Person-in-the-Rain test is a personality test that helps to determine the most appropriate treatment approach for patients with mental illnesses relating aspects of the drawing, such as the position of the person and their protection from the rain, to aspects of a patient's personality, such as their self-image. In the present study, we compared the results of this test among 40 participants given two different sets of instructions: one in which they were told to "Draw-Me-in-the-Rain" <Me instruction> and another in which they were told to "Draw-Person-in-the-Rain" <Person instruction>. Although a marked difference was seen in the number and images of persons and situations in the drawings, no such differences were seen in other important indexes, such as the intensity of the rain or the inclusion of an umbrella. The results suggested that regardless of the instructions, all participants showed the same degree of defensiveness in their drawings. In a future study, we plan to perform a similar experiment, but to also assess the stress levels in the participants.

Key words: Draw-a-Person-in-the-Rain test, Instruction

## 問題と目的

雨中人物画 (Draw-A-Person-In-The-Rain) は Hammer (1958) により紹介され、「雨の中の一人の人物を描きなさい」と教示される。この描画法では描かれる雨はストレス、傘・コート・軒下などの雨よけは防衛、人物は自己と仮定して解釈がなされ、雨に象徴される不快なストレス下での自己イメージを知る目的で行われる。雨中人物画は石川 (1985) が日本に紹介し、その際に「人」という言葉は自己イメージにつながりにくく、抽象的な人物が出現した経験から、「人物」ではなく「私」という語に置き換えた。その後日本では「雨の中の私を描きなさい」という教示が普及し、雨中人物画は「雨の中の私」という名前で定着している。

「雨の中の私」の研究は、多方面から行われており、澤柳・石川・川口・大原 (1989) の森田療法を行った神経症患者のフォローアップに施行した研究や、藤掛・佐々木・大山 (1991) の非行少年を対象

とした研究、保健室登校の女兒を対象とした研究 (仲嶺・島田, 2008) など、さまざまな対象にした事例研究が行われている。これらは心理療法の経過に沿って複数回の「雨の中の私」を実施した研究であるが、強いストレス状態にあるときは強い雨や雨よけのない絵が描かれ、ストレス状態が改善されれば、雨は弱くなり雨よけがなされることが報告されている。また、森川・平井 (2010) による健常群を対象にした雨の程度とストレス反応、ストレスコーピングの関連を示す数量的研究からも、「雨の中の私」は描き手の心理状態を反映し、前述の解釈の妥当性が示されている。

このように、本邦では「雨の中の私」と教示する方法が用いられているが、本来の「雨の中の一人の人物を描きなさい」と教示して得られる描画と「雨の中の私」と教示して得られる描画の異同については確認されていない。たとえば、大学生を対象とした研究において、清藤・空井 (1998) の人物画では「目・鼻・口なし」が17%であったのに対し、奥田

(2009)の「雨の中の私」では47%に同様の特徴がみられたと報告されている。人物画における表情の省略は警戒心や逃避の表れと解釈されるが、なぜ大学生の「雨の中の私」にこうした特徴が多いのだろうか。

「雨の中の私」は、石川(1985)が病院臨床で用いるために「人」を「私」という表現に置き換えたわけだが、情緒的に安定した一般的な大学生を被検者とした場合、「私」という語が現実的な自己イメージと結びつくがゆえに抵抗が生じ、表情が省略された防衛的な絵になりやすいのではないだろうか。また野口・馬場(2016)は雨の思い出が「雨の中の私」として表現された例を提示し、強く印象に残った雨の記憶が再現される可能性を指摘している。さらに傘を用いた現実的かつ効率的な雨よけが多い背景には、「私」という語が現実的・日常的な場面を想起させやすく、「雨が降れば傘をさす」という常識的な判断が傘以外の表現を妨げている可能性もある。「雨の中の私」という教示が抵抗や固定したイメージを出現させやすいのであれば、「雨の中の人」という元来の教示で実施することによって、描画への抵抗が少なくなり、また、思い出に縛られない自由な表現がなされるのではないかと予想される。そこで、本研究は、「雨の中の私」と「雨の中の人」という教示の違いがどのように描画に反映されるのかについて検討することを目的とする。

## 方法

### 1. 被検者

被検者は40名(男女各20名)であった。描画は個人法で、A4画用紙と3B鉛筆を用いて「雨の中の私」と「雨の中の人」の絵を描くよう求めた。被検者それぞれが1枚目の絵を意識しないよう、1回目と2回目の描画は2週間の間隔をあけて実施した。

### 2. 教示

藤掛ら(1991)を参考に、「雨の中の私」教示(以下、【私教示】とする)と「雨の中の人」(以下、【人物教示】とする)の2種類の教示を用いた。教示は「今から絵を描いてもらいます。雨の中の私(人)というテーマで描いてください。雨と自分を含めていれば、どのような内容でも構いません。上手い下手を調べるものではありませんから、気楽な気持ちで描いてください。しかし、できるだけ丁寧に

描いてください。この鉛筆で描いてもらいますが、消しゴムを使っても構いません。用紙の方向は縦方向とします。時間の制限はありません」とした。また、教示の順番による影響を考慮し、【私教示】を1回目に行う群20名(男女各10名)と【人物教示】を1回目に行う群20名(男女各10名)に分けて実施した。

### 3. 描画後の質問 (Post Drawing Interview : 以下 PDI とする)

描画後に被検者がどのような場面を想定して描いたのかを確認するために、「あなたの描いた絵について説明を聞かせてください」「絵の中の人は誰ですか、何をしていますか」「絵の中の人の気持ちを教えてください」「この絵に描かれたことは、あなたが実際に体験したことですか」などの質問を行った。また、2回目終了後には感想を求めた。PDIの実施時間は約10分で、筆者(以下、第一著者を指す)が被検者の説明をその場で記録し、録音は行わなかった。

### 4. 倫理的配慮

実施にあたっては、調査への協力は任意であること、描画の途中でであっても中止できること、個人が特定されない形で論文に絵を掲載する場合があることを説明して、書面にて同意を得た。

## 結果

描画指標とPDIは雨がストレス、雨よけが防衛、人物は自己と仮定されるという従来の仮説、また奥田(2009)や加藤・喜田(2011)の大学生を対象とした研究を参考に設定した。

被検者40名に対して実施した80枚の描画を対象に、【私教示】と【人物教示】の描画指標とPDIについて性差による出現頻度の偏りを比較した。観測度数が10以下のセルがあるため、Fisherの直接確率検定を用いた。その結果、すべての指標において有意な偏りは認められなかった。

描画指標とPDIについて【私教示】と【人物教示】の出現頻度をTable 1に示した。

### 1. 描画指標の分析

#### (1) 人物像の数

これまで【私教示】ではあまり報告のなかった複

Table 1 描画指標と PDI の出現頻度

			私教示		人物教示		Fisher の直接確率 検定
			頻度	%	頻度	%	
描画指標	人物像の数 *	単数	39	97.5	32	80.0	p = .03
		複数	1	2.5	8	20.0	
	人物像の表現 (単数の人物像を対象)	具象	28	71.8	24	75.0	n.s.
		白抜き	4	10.3	3	9.4	n.s.
		記号	4	10.3	5	15.6	n.s.
		部分・人物像の欠如	3	7.7	0	0	n.s.
	目・口の有無 (単数の人物像を対象)	有り	21	53.8	20	62.5	n.s.
		無し	18	46.0	12	37.5	n.s.
	表情 (単数の人物像を対象)	無表情	9	42.9	9	45.0	n.s.
		微表情	3	14.2	3	15.0	n.s.
		負表情	1	4.8	1	5.0	n.s.
		正表情	8	38.1	7	35.0	n.s.
PDI	雨よけ (単数の人物像を対象)	有り	32	82.1	25	78.1	n.s.
		無し	7	17.9	7	21.9	n.s.
	雨の量	少ない	11	27.5	13	32.5	n.s.
		普通	15	37.5	18	45.0	n.s.
		多い	14	35.0	9	22.5	n.s.
	人物のモデル *	本人	36	90.0	6	15.0	p = .001
		他人	4	10.0	34	85.0	
	人物像の性別 * (単数の人物像を対象)	同性	39	100	25	78.1	p = .003
		異性・不明	0	0	7	21.9	
	シチュエーション *	日常・経験	22	55.0	6	15.0	p = .001
		イメージ	18	45.0	34	85.0	

\* 有意差あり

数の人物像が描かれた絵が出現したため、人物像の数を指標として比較した。

描かれた人物を『単数』と『複数』に分類した結果、【私教示】では 39 名 (97.5%) が『単数』の人物像を描いたのに対し、【人物教示】では 32 名 (80%) であった。両群の出現頻度について、Fisher の直接確率検定を用いて比較した結果、有意な偏りが認められた ( $p = .03$ )。

以下の分析では、複数の人物像が描かれた絵は分類が複雑になるため、描画指標は雨の量を除いて『単数』の場合にのみ比較した。

## (2) 人物像の表現

着衣や肉付きが描写されていた場合を『具象』、人物の中身が空白で描かれていた場合を『白抜き』、棒人間で表現されていた場合を『記号』、手のみ・足のみ、人物描写なしの場合を『部分・人物像の欠如』と分類した。

両教示ともに『具象』が最も多く、【私教示】では 28 名 (71.8%)、【人物教示】でも 24 名 (75.0%) であった。両教示の出現頻度を Fisher の直接確率検定を用いて比較した結果、両教示の間に有意な偏

りは認められなかった。

## (3) 目・口の有無、表情

少なくとも目、口が描かれていた場合は『目・口有り』、後ろ姿、顔を隠す、顔描写なしは『目・口無し』と分類した。その結果、『目・口無し』が【私教示】では 18 名 (46.0%)、【人物教示】では 12 名 (37.5%) となった。Fisher の直接確率検定を用いて比較したところ、両教示の間に有意な偏りは認められなかった。

さらに『目・口有り』に分類された【私教示】の 21 枚、【人物教示】の 20 枚の表情について、目、口、眉などが描かれており感情が表れていないものを『無表情』、口角、眉が下がっているなど負の感情を表しているもの、また、負の感情に限らず目や口に何らかの変化があるものを『微表情』、泣く、怒るなど負の感情をはっきりと表しているものを『負表情』、口角が上がっている、目が三日月型など正の感情を表しているものを『正表情』として分類した。表情の例を Figure 1 に示した。その結果、【私教示】では『無表情』が 9 名 (42.9%)、『正表情』が 8 名 (38.1%)、【人物教示】では『無表情』

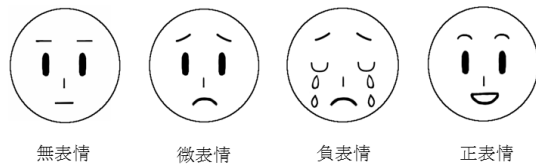


Figure 1. 表情

が9名(45.1%),『正表情』が7名(35.0%)であった。表情については出現頻度の少ない分類があったため、統計的な検定は行わなかった。

#### (4) 雨よけの有無・雨よけ手段

雨よけがある場合は『雨よけ有り』, ない場合は『雨よけ無し』に分類した。その結果,【私教示】では32名(82.1%),【人物教示】でも25名(78.1%)が『雨よけ有り』に分類された。Fisherの直接確率検定を用いて比較したところ, 両教示の間に有意な偏りは認められなかった。

『雨よけ有り』の場合, 雨よけ手段を『傘』と『傘以外』に分類した結果,『傘』が【私教示】では26名(81.3%),【人物教示】では18名(72.0%)を占めた。両群の出現頻度をFisherの直接確率検定を用いて比較した結果, 有意な偏りは認められなかった。

#### (5) 雨の量

それぞれの絵において, 雨がどの程度降っているかを調べた。分類については筆者ら2名(うち1名は臨床心理士資格を有する教員)が『少ない』『普通』『多い』の描画例を選定し, それを基準として筆者を含む臨床心理学専攻の学生3人の合議により『少ない』『普通』『多い』のいずれかに評定した。【私教示】では『少ない』が11名(27.5%),『普通』が15名(37.5%),『多い』が14名(35.0%),【人物教示】では『少ない』が13名(32.5%),『普通』が18名(45.0%),『多い』が9名(22.5%)であった。両群の出現頻度についてFisherの直接確率検定を用いて比較したところ, 両教示間に有意な偏りは認められなかった。

## 2. PDIの分析

PDIは描かれた絵を理解する目的でいくつかの質問を行った。本研究では被検者により説明された内容から分類を試み, 統計的分析が可能であった人物像のモデルと性別, シチュエーションについて検

討した。

#### (1) 人物像のモデル

被検者40名に対して実施した80枚の描画について, 描画後に「絵の中の人は誰ですか」と尋ねた。被検者の説明から人物像が複数であっても自分がモデルとして含まれている場合は『本人』, それ以外の場合は『他人』に分類した。両群の出現頻度についてFisherの直接確率検定を用いて比較したところ有意な偏りが認められ( $p=.001$ ),【私教示】では『本人』が多く,【人物教示】では『他人』が多かった。

人物像の性別について被検者と同性の人物像は『同性』, 異性または性別の評定が困難であった場合『異性・不明』に分類した。人物像の性別は人物像が『複数』になると組み合わせが複雑になるため, 人物像が『単数』の71枚の描画を対象にした。

【私教示】では『異性・不明』は出現しなかったのに対し,【人物教示】では7名(21.9%)に出現した。両群の出現頻度についてFisherの直接確率検定を用いて比較した結果, 有意な偏りが認められた( $p=.003$ )。

#### (2) シチュエーション

描画中のシチュエーションが日常の場面や, 特定の経験や思い出は『日常・経験』, 特定の経験ではなくイメージした場面と答えた場合を『イメージ』に分類した。両群の出現頻度についてFisherの直接確率検定を用いて比較した結果,【私教示】では『日常・経験』,【人物教示】では『イメージ』が有意に多いことが示された( $p=.001$ )。

## 考察

【人物教示】と【私教示】の描画指標とPDIの特徴を比較した結果,【人物教示】では【私教示】に比べて, 人物像の数が多く, 自分以外をモデルとして, 特定の経験ではないイメージした場面を描くことが示された。

【人物教示】に複数の人物像が描かれやすかった点について, 本法は元来“Draw-A-Person-In-The-Rain”と教示し, 一人の人物を描くように教示する。本研究では石川(1985)の「雨の中の私」に対応するものとして, 「雨の中の一人の人」ではなく, より日本語として自然な「雨の中の人」の表現を用





Figure 2 人物像『複数』



Figure 3 人物像『複数』



Figure 4-1 【私教示】



Figure 4-2 【人物教示】

いることとした。しかしながら、一人に限定しなかったことで【人物教示】では『複数』の人物像が描かれることが有意に多いという結果となった。【人物教示】の『複数』には「雨の中の人から、大勢の人が雨の中を移動するイメージを思い浮かべた」と説明された例や (Figure 2), 「仕事や家庭のことで上手くいっていない人。後ろの子供たちが無邪気に通り過ぎることで、おじさんとの対比を表している」と説明され、複数の人を描くことで孤独感を表現した例など (Figure 3), さまざまな表現が見られた。人数を限定しないことにより、描き手の心情が投射された表現になる可能性はあるものの、「雨の中の一人の人」と教示するほうが描き手の自己と対応させた解釈につながりやすいと思われる。

余田・石田 (2014) は人物画と自画像に投射される自己イメージの意識水準には重なりあうところもあるが、教示内容や課題の自由度に違いがあるため、描かれた2枚の人物像にはおのずと違いが生じてくるはずであると述べている。本研究でも【私教示】と【人物教示】に違いが生じると予想した。特に一般的な大学生を被検者とした場合、【私教示】によって「自分を描くことに抵抗を感じ、表情が省略されるのではないか」「自らの経験や現実的・日常的な場面が想起されやすく、傘が雨よけとして用いられるのではないか」と考えた。しかしながら、両教示によって描画指標に有意な差は認められず、【人物教示】でも表情の省略がなされ、傘が雨よけとして用いられた。このことは【私教示】であるから抵抗が生じるのではなく、抵抗が生じる被検者は【人物教示】でも抵抗は生じるということであり、自己の感情などが投射されやすい表情などへの抵抗は両教示で共通していること、傘という雨よけが自然なストレスへの対処を象徴しているのではないかと考えら



Figure 5-1 【私教示】



Figure 5-2 【人物教示】

れた。

Figure 4-1 と Figure 4-2 は同一人物の【私教示】と【人物教示】である。【私教示】では「自分ではない、人生に行き詰った人。自虐的で自暴自棄、雨に洗い流してもらいたいと途方に暮れている。ザーって強い雨。そばにある傘は雨よけをしていないことを強調している」と述べ、【人物教示】では「人生どうしようとなった女の子。中高生。強めの向かい雨、守ってくれるものがない。前回の雨は洗い流すイメージだったけど、今回の雨は障害」と述べていた。PDIの説明は異なるものの、強いストレス状態とストレスへの対処は共通しており、教示にかかわらず描き手のストレス状態が投射された例と言えるだろう。

一方、Figure 5-1 と Figure 5-2 のように教示によって表現が異なる例もみられた。【私教示】では「雨が降っている中、自分が立っている。雨は多めで、どよとしていて暗い」と述べたが、【人物教示】では一転して「雨の中遊んでいる女の子。雨は遊べるくらいで激しくない。水たまりがあったら楽しいだろうなと思って描いた」と楽しげな雰囲気が

感じられる絵になった。2週間の間にストレスに対する認知が変化した可能性も考えられるが、【人物教示】実施時の感想では「もし今日、雨の中の私と言われたら、前と同じ絵になったかもしれない」「雨の中の人、と聞いて、雨の中で楽しそうにしている人にしようと思った」という感想が述べられた。この例では【私教示】では自分をイメージし、【人物教示】では自分とは結びつかなかった例と言える。今回の研究では、描画時のストレス状態を測定しなかったため、出現したこれらの変化が教示によるものか、被検者のストレス状態の変化によるものかを検討する必要がある。しかしながら、【人物教示】は自己イメージにつながりにくいために、被検者があまり自覚していないようなストレス状態、またストレスへの対処を捉えているとも言える。【私教示】と【人物教示】の組み合わせによって、被検者のストレス状態を多面的に捉える可能性を示唆する事例かもしれない。

石川（1985）は自己イメージにつなげる工夫として、「雨の中の私」という教示を用いたが、一般の大学生であればそのような配慮は特に必要ではなく、基本的には「雨の中の私」と「雨の中の人」に大きな差はないと言えよう。

投映法である描画テストの教示は被検者に対して発せられる刺激であり、それにどのような反応を示すのかを解釈する。木を描く場合でも、「1本の実のなる木を描いてください」と「木を描いてください」教示する場合では、描かれた木の数や実に対する解釈は当然のことながら異なる。雨中人物画の場合でも、教示によって表現が異なる可能性を予想したが、「私」という語は話し手自身を指す語であり、検査者が「雨の中の私を描いてください」と教示しても、被検者がどのように受け止めるかには個人差があり、【私教示】がより自己イメージにつながるとは限らないことが示された。本法においても、検査者がどちらの教示を用いたのか、そして被検者はどのように受け止めたのかについて、十分に確認しながら解釈することが、被検者の理解につながると考えられた。

今後は描画時のストレス状態を測定する必要があるが、質問紙法での測定は意識的なストレス状態との関連が強いことが予想される。様々な視点から客観的・主観的な被検者のストレスの状態を測定し、【私教示】【人物教示】と照合することが今後の課題である。

< 付記 > 本論文は平成28年度に提出された中京大学心理学部卒業論文を一部修正したものである。

#### 引用文献

- 藤掛明・佐々木恵美・大山晋（1991）. 非行少年の「雨の中の私」画の分析 日本犯罪心理学会第29回大会論文集, 88-89.
- Hammer, E, F (1958), Draw-A-Person-in-the-Rain-Test Clinical Application of Projective Drawings. Illinois: Charles C. Thomas.
- 石川元（1985）. 雨中人物法 こころの臨床ア・ラ・カ・ル・ト 11, 43-49.
- 加藤由紀・喜田裕子（2011）. 「雨の中の私」画における反応出現頻度とその発達の特徴 富山大学人文学部紀要, 54, 41-52.
- 清藤理恵・空井健三（1998）. 人物画からみた現代大学生の心的特性の変遷 中京大学文学部紀要, 33, 97-108.
- 森川友子・平井達也（2010）. 大学生における「雨の中の私」画とストレス反応・ストレスコーピングとの関連 人物の感情に注目して 九州産業大学国際文化学部紀要, 47, 163-179.
- 仲嶺裕子・島田さつき（2008）. 「雨の中の私」画を用いた保健室登校女児とのかかわり カウンセリング研究, 41, 315-322.
- 野口つばさ・馬場史津（2016）. 雨のイメージと「雨の中の私」の描画の関係 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 15, 19-25.
- 奥田涼子（2009）. 描画テストによるストレス対処の検討 雨中人物画を用いて 2008年度中京大学心理学研究科修士論文 未公開
- 澤柳志津江・石川元・川口浩司・大原建士郎（1989）. 「雨中人物画」に表れた森田療法の治療過程 臨床精神医学, 18, 81-89.
- 余田明佳・石田弓（2014）. 「自分画 人物画連続技法」に関する基礎的研究 臨床描画研究, 29, 104-120.